

感情を表す動詞「困る」が示すテンス・アスペクト

三枝 令子

要旨：

感情を表す動詞<困る>は、タ形で発話時の話し手の気持ちを表す。しかし、ル形も発話時の話し手の気持ちを表すことがあり、両者の使い分けが問題になる。両者が文中でどのように用いられることが多いかを観察した結果、ル形はアスペクト的には完成相、タ形は継続相を表し、また、テンス性は失われていると考えられる。両者のアスペクトの違いにより、ル形は一般的、タ形は個別的な意味を表す。

キーワード：感情動詞、テンス・アスペクト、困る、困った

1 はじめに

感情を表す動詞においては、タ形が現在、すなわち発話時の話し手の気持ちを表すことはよく知られている。たとえば、次のような例がある。

(1) <レストランで>

客：4人なんだけど。

店：申し訳ありません。本日は、予約でいっぱいでございます。

客：え、困ったなあ。どうしよう。

しかし、一部の動詞は、現在の感情を表すのにタ形と共にル形が使われる。上の例でも、ニュアンスは変わるが、「え、困るなあ。どうしよう。」と「困る」を使うことができる。また、ル形でなければならない次のような例もある。

(2) <アルバイト先で>

店員：明日、休ませてもらいたいんですが。

店長：え、そんなこと、急に言われても {困る・*困った} よ。

感情を表す動詞<困る>において、ル形、タ形はどのように使い分けられているのか、ニュアンスの違いはどこから生じるのかを考えるのが小稿の目的である。

2 先行研究

動詞のテンス、アスペクトにかかわる研究論文は数知れない。しかし、感情を表す動詞に絞って論じたものはさほど多くない。この中で、本稿に特に関わりのある研究として、

次の二点をあげることができる。一つは、長野 (1995) で、これは話し言葉における「(誘因) ニ～スル」型の感情表現の動詞 150 を、その心的状態の主体に話し手をとる傾向がどの程度強いのか、第三者をとる可能性がどの程度あるか、という度合いを「一人称度」という独自の尺度によって6段階に分けたものである。分類、分析の結果、「スル」か「ナル」といった動詞の形態的特徴と「一人称度」との間にある程度の対応が見られることが示された。従来、感情形容詞や思考動詞の主体の人称制限については論じられてきたが、感情動詞の人称制限に注目した点が目新しい。ただ、本稿で扱おうとしている動詞、すなわち「タ形で「発話時の話し手の心的状態」を表すもの(例:「弱った」「困った」「驚いた」がある)」については、「多くはCグループに属するが、A、B、さらにD、Eグループにも存在し、その分布は、{表1}の一人称度の高さとは平行していない。」として、「一人称度」の分類とは異なる観点の必要性を示唆している。

山岡 (2000) は、日本語の述語を、文形式そのものの機能的意味から分析分類したものである。本稿で扱う動詞は、山岡の分類では、大きくは感情動詞文に入るものだが、その分析記述はち密で行きとどいている。そこでは感情動詞は、感情表出、感情変化、感情描写動詞に分けられ、それらが、思考、情意、感覚、知覚という四つの意味特徴によってさらに分類される。ただ、文形式から動詞を分類しているので、〈困る〉のル形は、情意表出動詞文に用いられ、タ形は、情意変化動詞文に用いられると分析される。すなわち、同じ語幹を持つ動詞が異なる文機能を持つ動詞として別個に扱われることになる。

なお、本稿で扱おうとしている〈困る〉については、工藤 (1995: 185) に、ル形は能動的、タ形は受動的という指摘がある。さらに、金水 (2000: 61-62) では、スル・シタの「その他の用法」として〈困る〉が取り上げられ、「スルの場合はしばしば条件節と共に用いられることから、法則的・一般的情報として述べる傾向が強い」「一方、シタの方は、すでに当該の感情が生じたあとの段階に今あることを述べる、パーフェクト的な表現である」という指摘がなされていて、小稿の分析結果と重なる点が多い。本稿では、〈困る〉の使われ方全体を話し言葉コーパスで検討し、他の感情を表す動詞も視野に入れたうえで、「困る」「困った」に意味の違いが生ずる理由を考えたい。

3 〈困る〉の使われ方

まず、〈困る〉の活用形等が話し言葉においてどのように使われているかを見てみる。言語データは、名大話し言葉コーパスを使用した。

表1 <困る>の頻度¹

	用例数	%
困る	113	59
困った	25	13
困っている/ていた	14	7
困っちゃう	17	9
困らない	11	6
困って	3	2
困ったら/たり	2	1
困ってない	1	1
困らせる	1	1
その他	5	3
計	192	100

表1では、用例数の多い形から順にならべたが、タ形の「困った」は、全体の1割強、それに対して、ル形の「困る」は6割と数多く使われていることがわかる。また、今回のデータでは「困っている」というテイル形より「困っちゃう」類のほうが使用頻度が高かった。

次に、「困る」「困った」が文の中でどのように使われているかを見てみる。表2にその一覧を示す。表中、<独立用法>とあるのは、「うーん、困ったね。」のように、<困る>が従属節を持たず、また主語も明示せずに主文の述語として用いられている場合を指す。<条件><ても>等は、<困る>が主節の述語として用いられているときの従属節のタイプを分類したものである。<連用用法>は、「ほんとに、ほんとになくて困る。」といった連用形接続のものを指す。<は/が/も>は、「もう、あれはほんとに困った。」のように、「は/が/も」が<困る>に係る場合を指す。なお、<困る>が引用節内で使われている場合は、引用節内での用法によって分類した。

表2 「困る」「困った」の文内での使われ方

	困る	%	困った	%
条件（と、たら、れば）	35	31		
ても	13	12		
ては、のでは、それでは	10	9		
は/が/も	22	19	4	16
に/にも	4	4		
連用用法	8	7		
独立用法	9	8	14	56
連体修飾	8	7	7	28
その他	4	4		
合計	113	100	25	100

¹ 「困る」の中にマス形の「困ります」1例を含む。「困っちゃう」の中に、タ形1例、テイル形1例を含む。

「と・たら・ば」はもとより、「ては」「ても」も、後者は逆接だが、広くは条件を表すと言える。ここまですべてを条件に含めると、ル形の「困る」が条件文で用いられる率は、全体の半数を超えることがわかる。次がその用例である。以下、名大コーパスの用例は「名大」と記す。それ以外は作例である。

- (3) あの一、コンビニとかでおにぎりとかが買えないとやっぱり困るしー。(名大)
- (4) わかんないじゃ困るでしょう。(名大)
- (5) 私がいないのに、私の部屋にいられても困る。(名大)

従来、感情を表す動詞の現在形は、話し手の発話時の感情を表すと言われてきた。たとえば、寺村(1984)は、「これら(筆者補:思考動詞「思う・信じる」や感情形容詞「コワイ・ウレシイ」)は、主観的な感情の形容詞と同じく、基本形で発話時の話し手の気持ちを表す」と述べている²が、ル形が用いられる文を見ると、話し手の気持ちではなく、むしろ、一般的な事実を示しているようだ。

「困る」で、条件文の次に多い使われ方は、次のような「～{は・も・が}困る」というものである。

- (6) これだからこうさあ、何、お坊ちゃん育ちの人は困るよね。(名大)
- (7) うーん、確かにね男の人へのプレゼントは、困るよね。(名大)
- (8) ホームステイとかも困るよねー。(名大)

本来<困る>は、「～は(が)～に困る」という文型を持ち、長野(1995)の用語で言えば「感情の誘因を表す補語」をとる動詞に入る。しかし、今回のデータでは「に/にも困る」という文型は少なく、「は/が/も困る」という文型が多かった。一方、タ形の「困った」は、条件節とはいっしょに使われない。「困った」がもっともよく使われる場合は、以下のような独立用法、すなわち、話し手の感情が「困った」とそのままの形で示されるものである。なお、「もんだ」が続く場合も、この独立用法に含めた。

- (9) A: とりあえず下降りるしかないよね。
B: うーん、上に行ってもどこにも***。
<間>
A: うーん、困ったね。(名大)

² 寺村秀夫(1984)『シンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版 104頁

- (10) 今週末はね、レジユメをまだ完ぺきに仕上げないから、あれを手入れて、で印刷しなきゃいけないとか、そういう作業があつて。うん。ゆっくり、やってらんないね、困ったな。(名大)

「困る」の独立用法というのは、次のように、話し手の発話時の感情が示されているものであるが、こうした例は「困った」に比べると少ない。

- (11) A: ひと月ないよね。でもとにかく早く戦争終わってくれる、終わってほしいな。
 なんかね、すごい嫌だ。
 B: 困るね。でもここまでは終わりそうもないと思わない。(名大)
- (12) A: だから値段なんて全然わかんないわけ。
 B: 困るわ。
 A: そう。(名大)

4 ル形、夕形の時制

ル形の「困る」の多くは、条件節とともに、また「～{は・も・が} 困る」の文型で使われる。意志性のある動作動詞の場合は、条件文で使われても、条件節自体は仮想の出来事を示すが、「天気が良ければ行きます。」と、話し手の発話時の意思を表すことができ、そこには未来というテンスが示される。しかし、「困る」という感情を表す動詞が条件文で使われる場合には、「こういう場合にはこうなる」という一般的な原理が示され、そこには現実的なテンス性は示されない。

また、「困る」は、「題目—解説」という形をとって使われることが多い。尾上(1982)は、「アルコールは水に溶ける」「私は毎朝5時に起きる」といった真理、習慣を表す文に関して「述語の品詞は動詞でありながら、意味の姿としては形容詞文的であるが、実は文型においても形容詞文に近づいていることを見逃してはなるまい。注意してみれば、必ず「—ハースル」と題目—解説の形式をとっていることがわかるが、題目—解説スタイルとは「それについて語るべき対象」と「語る内容」とに分けて事態を表現するスタイルであり、これは基本的に形容詞文の主語と述語の関係に近いものと考えられる」と述べているが、本来二格をとる感情動詞にも同じような特徴がみられる。

「は・も・が」文において「は・も・が」で取り立てられているものを見ると、「困る」と「困った」には明らかな違いがある。ここでは「困る」の現れる文や句内で「は・が・も」がある場合、それが取り立てている語を見してみる。ただし「では」は除く。また、「困ったよ、ありゃ。」のような倒置文も含めたが、明示的に示されている語のみを見るので、「私がないのに、私の部屋にいられても困る。」といった文では、「困る」の主格は「わたし」と推測されるが、明示的に示されていないので取り上げていない。なお、「わたし、一度

すごい困ったのはさ」という文の場合、表2では、この文の文型は連体用法に分類したので、ここで見る例の数と表2の「は・が・も」欄の数とは一致しない。以下が、「困る」「困った」に係る「は・が・も」などによって取り立てられている語句である。

困る(32例)

- は(9例):お坊ちゃん育ちの人は/プレゼントは/それは(2例)/あれは(2例)/
しゃべりすぎるのは/3人組の人の一人は/とかなったときは
も(7例):ホームステイとかも/それも(2例)/お医者さんも(2例)/女の子も/
教育熱心なものも
が(5例):文字化する人が/とかっていう性格が/これが/Xが/あとが
無助詞(8例):先生/それ/あなた/あんた/何しゃべるか/そんなの/そんなもの/トム
って(3例):こういう境目の人とかって/あんな人のいい人って/なんでもいって

困った(8例)

- は(2例):あれは/ありや
も(1例):俺も
が(2例):わたしが/監督してらした方が
無助詞(3例):わたし/誕生プレゼント/何か

「困る」「困った」にそれを感じる主体というものは必ず存在するわけだが、ここでは同一文内に明示的に示された「は・が・も」で取り立てられている名詞・名詞句を見ている。この一覧から「困る」が使われている文において、1人称の話し手を明示する例は32例中1例もなく、一方、「困った」が使われている文では8例中3例で1人称の話し手を明示的に示している。すなわち、同じ感情動詞の<困る>でも、ル形とタ形とで明示的に取り立てられるものに違いがある。

また、この一覧から、感情を表す動詞「困る」と人称の関係の二通りのありようも見て取れる。「困る」の主体は、報告文といった客観的な描写を除いては、話し手自身が主体になるのが普通だが、そのほかに感情を誘発する対象が取り立てられることが多いという点である。

- (6) これだからこうさあ、何、お坊ちゃん育ちの人は困るよね。(名大)
(7) うーん、確かにね男の人へのプレゼントは困るよね。(名大)

こうした発話では、<困る>感情の主体は話し手自身だが、対象のほうが明示的に示されている。形容詞文や名詞述語文ならば、主語がそれに当たるだろう。

- (13) これは面白い。
- (14) こいつはいい。
- (15) あれはだめだ。

感情形容詞、評価形容詞の主語は、評価を受ける対象である。感情を表す動詞の場合にも、形容詞に近い側面を持つため、感情を誘発する対象が言語的にあらわされるようだ。

一方、タ形の「困った」では、上でみたように1人称が使われやすく、話し手の個人的感情が示される。この場合のタ形は、<困る>感情が始まったという完了を示していると考えられる。

本項の冒頭で示したように、「困る」のル形とタ形は、言い換えられる場合もある。しかし、その意味合いは同じではない。

(16) <レストランで>

従業員：すみません、皿を割ってしまいました。

店長：え、{困るよ・困ったなあ}、あれ高いんだ。

(17) 上司：資料は？

部下：それがプリンターの調子が悪くて、まだ印刷できてないんです。

上司：{困る・困った}なあ、時間がないんだ。

「困る」のほうが、相手を責める感じが強い。工藤（1995：185）に、ル形は能動的、タ形は受動的という指摘があることを紹介したが、この違いを述べたものと思われる。「困った」が話し手の個人的な感情を示すにとどまっているのに対して、ル形の「困る」では、事態を誰もが認識するはずの「一般的原理」ととらえていることが示されるため、結果的に相手の非を強調することになると考えられる。

表1で「困る」の活用形の中で「困っちゃう」の頻度が高いことを見たが、「困っちゃう」で取り立てているのは、3例中3例とも1人称の話し手（わたし1例/こっち2例）だった。「てしまう形」は、自然にそうなるという自発に近い働きをして動詞を無意志化するので、「てしまう」の接続によって、ル形による一般化を弱め、「困る」の非難がましさを和らげていると考えられる³。

述語用法のテイル形は、ル形が10例、タ形が3例の計13例あったが、そのうち10例が第三者を主体とし、3例が同一文内には記述がなく、残り2例が1人称を主体としている。テイル形が様態の客観的な描写にもっぱら使われることがわかる。

³ 「泣く」「笑う」といった動作動詞も「てしまう」を付加することによって、「あれは笑っちゃう」のように感情を誘発する対象を「ハ」で取り立てることができる。

<困る>の使われ方として、連体修飾用法も、特にタ形に多くみられた。今回の発話データでは、連体修飾節の名詞には「こと」「の」が多かった。「こと」「の」はル形とタ形に共通して用いられるが、ル形とタ形で異なるのは「とき」「人」である⁴。「とき」「人」は、タ形にのみ使われ、ル形には使わない。動作動詞の場合には、「作る時」「作る人」「作った時」「作った人」と、ル形、タ形とも接続が可能だが、「困る」では、「困る人」「困る時」とは言えず、その感情が発動された「困った」によってはじめて「とき」「人」を修飾できる。また、「困った人」には二通りの意味がありえる。

(18) 就職に困った人が相談に来た。

(19) 彼は、人の気持ちが読めない困った人だ。

すなわち「人」が「困った」の主格である場合と、対象の場合である。後者の「外の関係」の場合には、「困った」が形容詞的役割を担うので、「困った会社」「困ったお客」のように独立して使うことが可能である。

5 感情動詞における「困る」の位置づけ

感情を表す動詞には、<困る>に代表される、タ形で話し手の発話時の気持ちを表すものがあるが、感情動詞であっても、タ形が過去を表すものもある。これらの動詞群のそれぞれの特徴を考え、<困る>が感情動詞の中でどういう性格をもつものなのかをみってみる。

タ形が話し手の発話時の気持ちを表さない動詞と表す動詞は、それぞれの形態的、意味的性格から次のように分けることができる。

タ形が発話時の話し手の気持ちを表さない感情動詞

(1) 動詞にガ格を含むもの

胸が痛む、心がおどる、気がゆるむ、はらわたが煮えくりかえる、溜飲が下がる

(2) 動詞に擬態語を含むもの

うんざりする、はらはらする、わくわくする、むかむかする、むしゃくしゃする

(3) 動詞に「ト格+スル」を含むもの

ぞっとする、はっとする、ぎょっとする、どきっとする、むっとする

(4) 動詞に「ト格+ナル」を含むもの

かっとなる、ぎょっとなる

(5) 動詞にヲ格を含むもの

心を痛める、気をもむ、腹を立てる

⁴ 他に底の名詞として「ところ」「もの」がル形にのみ使われているが、これはタ形でも使用可能である。

以上の動詞は、タ形が発話時の話し手の感情を表すことはない。以下は、タ形が発話時の話し手の感情を表すものである。

タ形が発話時の話し手の気持ちを表す感情動詞

(1) 驚き、困惑を表す動詞

困る、弱る、あきれる、あせる、おどろく、つかれる

(2) 不快から快への感情の変化を表すもの

助かる、せいせいする、さっぱりする、ほっとする、すっきりする、すつとする

(3) 快から不快への感情の変化を表すもの

頭にくる、がっくりくる

この分類から以下の点が指摘できる。

- 1 タ形が発話時の感情を表さない動詞は、様態を叙述するという特徴を持つ。それは、動詞の中に格を含んだり、擬態語を含んだり、また、擬音語を「と」格で受けることによって示されている。
- 2 タ形が発話時の感情を表さない動詞は、不快感を示すものが多く、また、一時的な感情が示される。逆に、タ形が発話時の感情を表す動詞は、不快から快への変化、快から不快への変化を表すものが多い。
- 3 タ形が発話時の感情を表す動詞の中には、大きくは不快に含まれる、驚き、困惑を表す動詞がある。これらの動詞は、日常の使用頻度が高く、そして、感覚の変化を示す「お腹が空いた」「のどが渴いた」や形容詞の「痛い!」「熱い!」と同じように、叙述性は薄く、感情をそのまま吐露する感動詞に近い表現となっている。
- 4 全体として、感情動詞には、描写型と表出型があり、描写型は、動作動詞と同じ時制を持つが、表出型の場合は、タ形は完了のアスペクトによって個人的な感情が吐露される。

今回の話し言葉コーパスでは、ル形にしてもタ形にしても、独立用法が5例を超えたのは、「困る」のほかには、「助かる」「疲れる」のみだった。日常の話し言葉ではかなり多く使われているように感じられるが、「困る」だけが使用頻度が高かったのは、あるいはコーパスの持つ性格によるのかもしれない。「疲れる」は、感情動詞というよりは、むしろ「のどが渴く」「お腹がすく」と同じように生理的変化を表すのが本来だろう。

6 まとめ

以上、感情動詞「困る」「困った」について、そのテンス・アスペクトを考えた。「困る」「助かる」などの感情動詞においては、ル形のみならずタ形も話し手の発話時の気持ちを

表すという点で特異である。しかし、文内での使われ方を見ると、タ形は独立用法が多く、ル形は条件文の主節の述語として、あるいは、「～は困る」の文型で用いられることが多いという点で、両者は異なっている。すなわち、テンスの面では<現在>を示すという点で共通しているが、アスペクトの面では、ル形は<完成相>、タ形は<継続相>を示している。言い換えれば、ル形は、<困る>に幅を認めず、まるごととらえ、タ形は、<困る>にプロセスを認めている。この違いによって、前者は一般的、後者は個別的な意味合いを帯びると考えられる。なお、タ形がテンス面で<現在>というのは不適切だから、テンス性は失われていると言った方が正確かもしれない。新屋 (1989: 7) は、「スル形⁵が話し手の発話時の主観を表す主観動詞のテンス」について、これらの動詞が「主観作用の生起、即ち変化の要素を含む」ため、「テンス的制約から自由」であると指摘している。この点についての更なる考察は今後の課題としたい。

参考文献

- 庵功雄・清水佳子 (2003) 『日本語文法演習 時間を表す表現 —テンス・アスペクト—』スリーエーネットワーク
- 岩崎卓 (2000) 「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学 新・文法用語入門』19巻5号 明治書院
- 尾上圭介 (1982) 「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1巻2号 明治書院
- 金水敏 (2000) 「1 時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子著『時・否定と取り立て』岩波書店
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト —現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 砂川有里子 (1986) 『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ 2 する・した・している』くろしお出版
- 新屋映子 (1989) 「日本語の主観用言における人称制限」『日本語学科年報』11 東京外国語大学
- 長野ゆり (1995) 「カットスルとカットナル —感情表現の動詞の主体の人称—」『日本語類義表現の文法 (上) 単文篇』くろしお出版
- 山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版

(さえぐさ れいこ 法学研究科教授)

⁵ 新屋 (1989) の「スル形」は、「スル」「シタ」両方の形を含む。